

第 12 回 IAEG アジア地域会議および第 16 回海外調査団参加報告

顧問 茶石貴夫

国際委員長 伊藤久敏

1. はじめに

第 12 回 IAEG アジア地域会議(アジアシンポジウム), 略称 ARC-12 は, Korean Society of Engineering Geology (KSEG)の主催により, 2019 年 9 月 24 日~26 日に韓国の済州島で開催された. 会議前の 23 日にはプレ巡検, 後の 27 日にはポスト巡検が企画され, 会議中の 25 日午後にも半日巡検とその後にパーティーが開催された.

日本応用地質学会(JSEG)は第 16 回海外調査団を 9 月 22 日~28 日の予定で企画し 14 名が参加予定であったが, 22 日に台風 17 号が済州島を直撃したため, 多くの団員が 25 日からの参加に変更を余儀なくされた. 日本以外の海外参加者, 韓国人参加者も足止めされたため, 22 日に開催された IAEG 総会や 23 日のプレ巡検に参加できなかった人も多かった. また, JSEG 海外調査団はポスト巡検の代わりに韓国で最も標高が高いハルラ山(標高 1,950 m)への登頂を行った. 残念ながら台風通過後の好天気が過ぎ去り, 中腹以上は雨, 山頂付近では嵐のようになって何も見えなかったが, 久しぶりの達成感を全員が味わった.

2. 第 12 回 IAEG アジア地域会議(ARC-12)

- ・開催日: 2019 年 9 月 24 日~26 日, プレツアー23 日, ポストツアー27 日
- ・会場: Booyoung Hotel & Resort

ARC-12 は, 有名な観光地である済州島南西海岸の中文リゾートにある立派な Booyoung ホテルの会議場で実施された. 主催者発表では参加者が約 390 人とのことであった. これは 2015 年に京都で開催された ARC-10 の 2 倍に近く, 一昨年のカトマンズでの ARC-11 と同規模であった.

今回の ARC-12 のメインテーマは, 安全な社会と環境のための応用地質の役割(Role of Engineering Geology for the Safe Society and Environment)で, 表-1 に示す 8 種類のトピックと一つの特別セッション(表-1 の SE)があった. 基調講演 7 件, 招待講演 17 件, 技術発表 132 件, ポスター発表が約 140 件であった(写真-1). 最も多いトピックは地すべり・土石流といった自然災害であったが, 分野は多岐にわたっていた. このほかに, 台湾の Chi-Chi 地震から 20 年を記念したワークショップ, 若手技術者のセッション(YEG)および IAEG の技術委員会 TC-25(地質工学的モデル)と TC-29(土や岩盤の構造と挙動)が特別セッションを行った. なお YEG は, IAEG の将来を考え活性化することを意図した, 40 歳以下の若手メンバーで構成されるグループである.

表-1 トピック別の発表数(欠席も含む)

テーマ分類		招待講演	口頭発表	ポスター	計
SR	土質力学, 岩盤力学	1	23	28	52
GHL	地すべり, 土石流	6	41	27	74
GHE	地震, 活断層	1	4	12	17
GHS	沈下や陥没	0	3	0	3
SI	サイトの調査, 特性	1	8	14	23
EH	環境地質・地下水	0	17	12	29
CM	建設と維持のための応用地質	0	17	24	41
NT	応用地質における新技術	3	16	10	29
SE	サイト特性等の高度解析	5	3	12	20
計		17	132	139	288

今回の ARC-12 では、投稿はアブストラクトのみで予稿集も電子データだけで印刷物は作成されず、論文の受付もなかった。主催者は、このスタイルが最近の主流と考えていたが、日本の学生からは発表しても実績にならないという理由で敬遠した人もいたと聞いた。

基調講演には、日本から京都大の千木良雅弘教授と岡山大の市川康明教授が招待された。そのほかにもヨーロッパや中国、アメリカからの基調講演や招待講演が多く、KSEGとしては相当大きな資金を投入したとのことであった。1997年に東京から始まったアジアシンポジウムは、規模が大きく派手になり過ぎた感はあるが、京都での開催時にその大変さを知っているだけに羨ましい気持であった。

会議中に、KSEGは韓国・日本・(台北)との共同ワークショップを開催したいとの意向があることを伝えられた。KSEGや台北グループには積極的に国際会議で発表し他国のメンバーと交流するなど、活動を支援する比較的若い年齢のメンバーが揃っているように思われた。JSEGにおいても、国際会議への参加や発表、将来日本で国際会議を開催することも念頭にいた動きが活発になることを期待したい。



写真-1 ポスター会場で IAEG 前会長の Scott Burns 教授を囲んだ JSEG のメンバー

3. 第 16 回海外調査団

今回の海外調査団は参加人数 30 名を見込んで募集したが、実際には 14 名の申し込みがあった。はじめにでも述べたように台風 17 号の影響で、当初の予定は大幅に変更せざるを得なくなった点は残念であったが、メインイベントのハルラ山登山には 11 名が登頂を果たした（写真-2）。山頂付近は暴風雨のため早々に下山したが、下山途中では一瞬天気が回復し、火山地形を眺めることができた。貴重な写真データとともに持参した高級カメラが修理不能になるなどの気の毒なアクシデントに遭遇した団員もいたが、高低差約 1,200m を 9 時間で全員無事に歩き切ることができた。



写真-2 ハルラ山山頂にて